Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-12-05

エスノメソドロジーとは何か?

樫村, 志郎

(Citation)
日本ファジィ学会誌,10(1):2-10

(Issue Date)
1998

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006512

Japan Society for Fuzzy Theory and Systems

日本ファジィ学会誌 Vol.10, No.1, pp.2-10 (1998)

解説

エスノメソドロジーとは何か?†

樫村 志郎*

エスノメソドロジー(ethnomethodology)は、社会的行為と状況の自然な秩序性の方法的生成についての経験的研究である。本解説では、この研究分野の方法と基本的成果についての概略的な説明を試みる。

まず、1.ではエスノメソドロジーの研究対象とその把握の特色を説明する。2.ではその主要な研究分野の一つである会話分析(conversation analysis)の方法について説明する。3.では、1970年代後半から発展した作業研究(studies of work)とよばれる研究分野について概説する。4.では、エスノメソドロジー研究の実践的意義について簡単に述べる。

本解説を通じて、私は、エスノメソドロジー研究がその他の研究と根本的に異なる点を、社会的行為の細部に深く埋め込まれた自然な秩序性(natural orderliness)の解明をめざすという点に求めている。

1. 研究対象

エスノメソドロジーは、社会に生きる人々の行為の自然な秩序性の生成に着目して、その方法論的基盤を解明しようとする研究である。それは、1950年代後半以来、カリフォルニア大学の複数のキャンパスを中心に、Harold Garfinkelとその協力者によって、発展させられてきた。エスノメソドロジーの語は、Garfinkelによる造語であり、人々の(=土着の)(ethno)・方法論(methodology)を意味している。[Garfinkel 1967:p.1]

その方法論的背景は、現象学による社会科学の基礎づけをめざしたAlfred Schutzの社会的世界の構成的現象学[Schutz 1967]、およびMax Weber, E. Durkheimらを中心とする20世紀初期のヨーロッパ大陸の社会学の総合を企てたTalcott Parsonsの社会システム論[Parsons 1951]にある。Garfinkelは、これらの基礎のうえに、社会システムの基盤に関する実験的な現象学的探求ともいうべき経験的研究プログラムをうちたてたのである。[Garfinkel 1963, Garfinkel 1967, Heritage 1984]

Garfinkelによれば、社会に生きる人々は、個々に、あるいは共同して、または、専門的に、あるいは素人として、さまざまな活動を行っているが、それらをいつも通常のものとして行っている。人々の行う活動は、社会の同輩たちが普通にお互いを観察することによってその「通常の意味」を知ることができるという性質をもっている。この性質の基盤には、社会の人々に共有される、土着の、意味発見の方法論があるという。[Garfinkel et al. 1987, Garfinkel & Sacks 1986, Psathas, Garfinkel, Sacks & Schegloff 1989]

行為の通常性を生み出す土着の方法論は、社会秩序の生成(the production of social order)を行う。または自然な状況で組織された通常的活動の秩序性(the orderliness of naturally organized ordinary activities)」[Livingston 1987:pp.10-12] 略称すれば、ある活動自身の「自然な秩序性」を生み出す。この自然な秩序性が社会の諸活動の中でいかにして人々によって生成されるか。これがエスノメソドロジー研究の基本問題である。

行為の科学においては、行為の「真の意味」は知ることができないと主張されることがある。し

† What is Ethnomethodology?
Shiro KASHIMURA

* 神戸大学法学部
Faculty of Law, Kobe University

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Fuzzy Theory and Systems

かし、これは行為の自然な秩序性の生成という現象にはあてはまらない。通常的に行われる活動には、自然な説明可能性があるからである。

たとえば、歩きながら会話をしている際、相手がある光景を見て微笑んだとしよう。その微笑の「真の意味」は私には知りえないものであるかもしれない。だが、普通は私は微笑を返すことによって、たとえば「その光景をともに楽しむ」という行為を行うことができる。このとき、私は相手の微笑の意味に応じて行為し、小さな社会秩序を生成させているといってよい。しかも、そのように行為するという仕方の中で、または、そういう仕方として、私は、相手の微笑の何らかの意味を知っているということになろう。私が知っているこの意味は、一部の行為の理論が想定するような「真の意味」ではなく、行為の「実践的な」あるいは「通常の」意味である。[Heritage 1984：p.143,Garfinkel & Sacks 1986：p.187-188.]

私たちは「その光景をともに楽しむ」ために、ことさらに討議をしたりする必要はないし、「意味を知る」という言葉の意味について合意する必要もない。実際に、私たちはそのような理論家の手続きを実行することはほとんどない。[Garfinkel 1967：p.275]エスノメソドロジー研究は、社会秩序の理論的バージョンではなく、実践的ないしは通常のバージョンをとらえようとするものだといえる。実は、社会学者による理論的社会認識であっても、それが社会学という社会的な活動として行われるという点に着目すると、それを1つの実践的な社会秩序生成活動として分析することができる。[Garfinkel & Sacks 1986：pp.165-167.]

専門家のものであれ、素人のものであれ、社会的活動の自然な秩序性の生成活動には、つぎのような特徴がある。

第1に、自然な秩序性は、理論的反省に基礎づけられた体系的方法でとらえられるよりも、人々の日常の必要に応じて、人々自身により、その場に応じて、簡明なものとしてとらえられるものである。この性質は、言語学上の「指標的表現」に類比して、実際的行為や表現の指標性(indexicality of practical actions)とよばれる。指標的表現は、「あれ」とか「私」のように、同一の語が使用の状況に応じて異なった、しかし明確な意味をもつが、行為もまた、場面に応じて異なる、しかし簡明な意味をもつからである。[Garfinkel 1967：p.7]

第2に、自然な秩序性は、頭脳の中の操作であるというよりは、たとえば微笑を返すという「見える事象」[Garfinkel 1963：p.190]としての「行為を行うこと」を通じてとらえられる。この場合、行為の「通常の意味」は、その行為とともに行われる日常的行為によって、そしてその中で、とらえられている。

ある行為の意味をとらえるのは、その場の外部にある知性や解釈機構ではなくて、その場に共属する、もう一つの行為である。そして、この意味発見の現場において、自然な秩序性を見い出す行為とそれを見い出される行為とは、日常的必要や社会的規範によって結合されている。

したがって、社会的活動の意味探求においては、観察行為とその対象は、ひとつの場を共有し、また依存しあっている。この性質は、行為の意味解明の「相互反映性」(reflexivity)とよばれる。[Garfinkel 1967：pp.7-8]

第3に、このような行為の共属性と相互依存性の中から、何かを行うという、合理的な説明可能性を備えた事態がいかにしてか達成されている。社会的事態の合理性は、事態の自然な秩序性のなかから、いかにしてか出現してくる。とりわけ、この出現や達成は、行為者自身によって、ある単一の行為として、状況のコンティンジェンシーを捨象したものとして、認識されうる。[Garfinkel 1967：p.10]この結果、社会的状況は、その内側から、自然な秩序性を乗り越える、「永続する社会」(immortal society)の秩序を生み出すことになる。この事態は、以上の独特の意味で、「秩序*」(アスタリスクが付される)とよばれることがある。[Garfinkel 1991：p.10]

以上の特徴をまとめて述べれば、人々の行為の自然な秩序性は、日常の必要に応じて、日常の必

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Fuzzy Theory and Systems

要に応える行為を通じて、日常的事態のなかで、そしてそれを乗り越えるような仕方を含みつつ、生みだされるものだ、ということになる。これが、人々の、土着の方法論のもつ一般的特徴である。

エスノメソドロジー研究は、人々の行為という対象を、他の行為の科学と共通にしているが、それを把握する仕方が異なる。そこで、その方法論的特徴を、通常の行為の科学との対比であきらかにしておくことが有益だろう。

第1に重要なことは、エスノメソドロジー研究は、他の行為の科学が一般的にそうであるのとは異なり、対象の類型的記述や法則的説明をめざすものではないということである。

ここで、対象の類型的記述とは、対象をある一般的類型の1事例としてとらえる記述をいい、対象の法則的説明とは、対象の在り方をある一般的法則に包摂することによって説明することをいうものとする。これらの記述や説明は、しばしば観察者自身の実践的関心、たとえば現状を改善したり、批判したり、利用したりする関心にもとづいており、類型や法則という一般的概念を導入することで対象に特定の秩序性を与える活動である。たとえば、会話者が微笑を交しあうという行為がある理想的なコミュニケーションのモデルにてらして欠陥がある行為だとみなされる多くの場合には、観察者の側に、そのコミュニケーションの在り方を改善したり、批判したり、計画化したりするという関心があるであろう。

だが、このことは対象の自然な秩序性をおおいかくしてしまう結果をもたらす。したがって、エスノメソドロジー研究においては、対象に対して実践的に働きかけようとする関心を取り去って対象を解明することが勧められる。

第2に、エスノメソドロジー研究は、対象の一般的概念による解明のかわりに、「自然な秩序性」の現場における「生産」の過程、ないしその「方法」による解明をめざすものである。

エスノメソドロジーの観点からは、社会の自然な秩序性は、人々が、状況のコンティンジェントな特徴を利用しつつ、共同して、達成するものとみなされる。これまでの行為の科学は、状況の生成された秩序の存在を前提し、また自らの研究の中で実践的に利用してきたが、それを研究の対象とすることには失敗してきた。これに対して、エスノメソドロジー研究では、人々が、状況の利用可能な特徴をどのように発見し、組織し、活用し、相互に説明しあい、ある合理的な意味が認められる事態を編成していくか、が問われるのである。

エスノメソドロジー研究を導く主要な方法論的指針は以上のものである。現象への実践的関わりの回避は、エスノメソドロジー的無関心(ethnomethodological indifference)[Garfinkel & Sacks 1981]とよばれ、現象の固有の方法的生成への関心は、固有適合性の要請(unique adequacy requirement)とよばれる。[Garfinkel & Wieder 1992：p.182]

2. 会話分析

会話分析は、日常会話という現象にエスノメソドロジーの観点から接近しようとする研究分野である。会話分析は、Garfinkelの共同研究者の一人であったHarvey Sacksを中心とする一群の研究者によって、1960年代から70年代を通じて発展してきた。現在では、会話分析は、日常会話に対する有効な接近法として、言語学、社会学、心理学、教育学、認知科学などと交流し、重なりあう分野として確立されてきた。そこでは、家庭や友人関係で行われる日常的会話ばかりでなく、医療や法、教育などの公式的場面で行われる会話も対象になる。会話分析はこれまでのところ、エスノメソドロジーの研究プログラムとしてはもっとも成功しているもののひとつといえる。[Heritage 1984, Heritage 1987]

われわれは、ごく普通の日常的な会話によって、近況、苦情、依頼、その他の日常的の意味を伝達し、共有したりしている。また、会話は、法廷尋問、医師の診察、政治家の討論などの専門的場面においても利用されている。広く発話の社会的組織を考えれば、これらの他にも、演説、講演、儀

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Fuzzy Theory and Systems

式などが存在することがわかる。[Sacks, Schegloff & Jefferson 1974]

これらはいずれも、人々が日常的に、あるいは、職業的場面のなかで、繰り返し行うことであって、自然な秩序性の例となっている。エスノメソドロジーのプログラムを適用することで、会話分析は、社会的状況のなかでの発話が達成する自然な秩序性の方法論的解明を行おうとする。ここでは、会話分析の方法を詳しく紹介すること(参照、[樫村 1996])は不可能であるので、その基本的な方法論的姿勢について、簡単にとりあげるにとどめる。

第1に、会話分析は、想像された会話や創作された会話ではなく、現実の会話を対象とする。これは、現実の会話だけが、会話者の自然な秩序性の形成を表わしているからである。想像された会話や創作された会話は、想像や上演といった現実の秩序性との関連はあるにしても、その会話の自然な秩序性との緊密な結合に欠けているからである。

第2に、会話分析は、会話の一般理論的モデルを前提にした研究ではなく、個々の現実の会話の詳細がいかにして、その同じ会話の過程の中から、会話者に確認可能な仕方で、固有の秩序をもつものとして立ち現われてくるかを理解しようとする研究である。**1.**で示唆しておいたように、実践的共同行為に関わる人々にとっては、会話の理論的モデルを知ることは可能でもないし、必要でもないからである。

第3に、会話者が会話の展開の中から、会話に固有の具体的秩序を形成していくために、会話者がいつでも利用できる方法がいくつかある。もっとも重要な手がかりは、会話そのものの構成部分である、発話、発話の相対的タイミング、発話の型についての知識、その他会話者自身の特性などに見い出される。

つぎに、短い会話の断片(表1)を用いて、会話の自然な秩序性が、いかに観察できるかを見ることにしよう。

ここに掲げるのは、1995年1月17日に阪神・淡路地方を中心におきた大地震の当日にテレビ番組で放映された電話取材のやりとりである。

なお、表1では、上下に並んだ「*」はそこに書かれた発話の重なりの開始、「：：：」は音の引き伸ばし、「?」は上昇イントネーション、「。」は下降イントネーション、「-」は語のいいさし、「、」は平坦なイントネーション、「hh」は吸い込む息を示す記号である。

表1 震災インタビュー(1995.1.17)

1 A：どうゆうゆれでしたあ*：：：：：?
2 B：　　*え?
3 A：どんなゆれだったんでしょうか。
4 B：どう-　どないしてええんかもう、
5　　hh　ちょうどシ車両：：：　あの：：
6　　シュプール号が到着してね：：：：：
7 A：はい、
8 B：車内点検しておったもんだから*自分は
9 A：　　*はい

表1の第1行は、会話者にとって確認可能な仕方で「質問」を行っているということができる。しかし第2行のBの発話は、第1行の発話に対して、何事かを行っている発話である。この発話(「え?」)は、会話者にとってともに確認可能な仕方で、第1行の発話を主題としてとりあげ、その発話の理解にトラブルがあることを、主張しているといえる。しかし、同時に第2行の発話は、第1行の発話がBに向けられたものであるというBの理解を表示するものでもある。こうして、第1に気づかれることは、会話においては、一つの発話はつねにそれまでの会話の状態や発話への理解を表示しているということである。

そうして、このことは、第3行のAの特徴ある発話、つまり、第1行の質問の確認可能な仕方での言い換えを引き出している。その反面で同時に、第3行の発話は、Bの第2行の発話が表示しているAの第1行の発話へのBの理解に対する、Aの理解を表示するものである。これらの結果として、第4-6行と第8行でBはゆれについての語りを始め、Aは「はい」という短い発話をはさむことで、Bの語りを促していく。以上の観察が示し

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Fuzzy Theory and Systems

ていることは、一つ一つの発話による先行する会話の理解は、会話の進行の一部でありつつ、その進行を制御する仕組だということである。

以上の簡単な考察は、私たちが行う会話が、つぎのような性質をもつことを示唆している。[樫村 1996：pp.149 ff.]

第1に、会話は、一つ一つの発話が行われる度に、それまでの会話の意味が、その発話の確認可能な詳細として、主張されるという、発展的な様相をもつ。会話は、一句一句が発せられる度に、その時点で、それまでの会話の在り方が、変容していくものであるといえる。上の会話の場合には、それは次第にインタビューとして構成されていっている。

第2に、会話における発話は、会話がいつでも発展的な開かれた様相のもとにあることへの考慮によって、計画された構造をもって生み出される。会話の発展的様相を実現するのは、他の会話者の発話であるから、一つの発話は、ある仕方でつぎの発話を生み出すような仕方で組み立てられている。

これは、たとえば、Aによる質問の言い換えのやり方に表わされている。第2行の発話はBの側の聴取に何らかのトラブルがあることを主張しており、Aの引き続く言い換えは、確認可能な仕方で、より丁寧で慎重な形式へと変化している。これは、Aが先行しているBの発話を、自己の引き続く発話の生産のための手がかりとしつつ、つぎに来るべきBの発話を望ましい形(質問への回答)へと誘導しようとする考慮を、確認可能な形で、表現するものである。

第3に、会話における発話が、他の会話者の発話の生産に結合されており、その意味で、他者の発話の意味を構成しつつ発見するものであることは、会話のごく通常の様相である。このような様相をはらみつつ、会話者は、互いの発話の意味を、つぎの発話によって解明しつつ、そのようなコンティンジェンシーから自立した意味をもつ相互行為として、地震のゆれという事実を解明するインタビューという場面を生成している。

周知のように、会話の多様性は、これまでも人類学、言語学、社会学、心理学、哲学など多くの分野で注目されてきた。しかし、これらの研究分野においては、会話は、民族、言語、社会、心、知性などを理解するという関心のもとで研究されてきたにすぎない。エスノメソドロジー研究の一分野としての会話分析は、会話そのものが、人々が共にある特定の方法を用いて実現する、ある特殊な自然の秩序の在り方であることを明らかにしようとする点に独自性がある。[Sacks 1992, Atkinson & Heritage 1984：p.1]

3. 作業研究

身体や道具や記号の使用は、多かれ少なかれ、専門化された知識と能力の成立を促すことが多い。しかし、会話の自然な秩序性が既存の研究によって見逃されてきたと同じく、通常の社会学その他の専門職研究や職業研究においては、職業を構成する作業それ自体の秩序ある在り方が見逃されてきた。こうした文化的対象を使用する行為を中心にする状況の研究は、専門的知識や専門的能力の在り方を、その使用の現場において、解明することをめざすことになる。この研究領域は、1980年代に、科学研究を中心にしていくつかの成果が公表され、「作業研究(studies of work)」とよばれるようになった。[Garfinkel (ed.) 1986：p.vii]

1.においては、私たちの自然な秩序性の流れの中から、社会的な合理性に裏付けられた事態がいかにしてか発生してくることに注意を促しておいた。**2.**でとりあげた会話分析は、日常的な場面や制度的な場面で行われる会話が、社会的な合理性を含む事態の成立にとって基礎的な重要性をもつことを明らかにしたといえる。作業研究は、この発想を押し進めて、自然な秩序性を生み出すための資源は、会話という形式をもつ発話の交換組織には限られないと考えるものだといえる。

作業研究は、人々の行為を自然に説明可能なものにしているものが、発話の調整のほかにも存在するという考えから行われる。それらは、視線そ

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Fuzzy Theory and Systems

の他の身体、物質的道具あるいは記号的概念の使用などである。[樫村 1994]

たとえば、会話分析と重なりあう研究関心のもとで、視線の重要性は比較的早くから研究されてきた[Goodwin 1981]。また、法的概念の使用についても早い時期に研究が行われてきた[Sudnow 1965, Pollner 1979]。演奏の場合には、楽器という道具、音についての聴覚、音楽の記号的概念および身体の動作が重要であると考えられた[Sudnow 1978]。実験科学や数学の場合には、道具、および記号、身体が、独特に編成される必要がある[Garfinkel, Lynch & Livingston 1981, Lynch 1985, Livingston 1986, Lynch 1991]。このほか、最近の作業研究の論文集は、社会学、法的規制、神秘学、記号使用などに含まれる作業をとりあげている[Garfinkel (ed.) 1986]。その中では、スポーツや武芸という行為の自然な秩序性には、身体の動作がより重要な役割を果たすことなども示唆されている[Girton 1986]。

自然な秩序性のさまざまな媒体は、具体的場面においては、同時並行に作用している場合もあれば、一つないしいくつかのものが主要に作用している場合もあると考えられる。エスノメソドロジーの研究領域の一つとしての作業研究は、こうした文化的存在のさまざまな編成を含むような、自然な秩序性の研究である。その焦点となる問題は、文化的存在そのものではなく、それらを用い、経験しつつ、何事かを実現していく、状況の自然的秩序性の在り方がいかなるものであるかということである。[Garfinkel, Lynch & Livingston 1981：p.137]

一つの研究から引用することで、この自然な秩序性の在り方を観察してみよう。これは、ジャズピアノのアドリブという作業の一部としての指の移行が、鍵盤という道具、手という身体部分、聴覚、音楽的概念の間の、調整された流れであることの報告である。引用中の[ ]のなかは私の補充である。

「[アドリブのなかで]ある長三和音を弾くという活動の経過の中にあって、その長三和音の構成音の確実な場所を私が知っているということは、つまり、その構成音へと私の演奏が向けられることができるということは、私がそこに行くための方法、私がその音を弾くためにそこに行くための確実な方法を身につけているということなのだ。弾くという観点からいうと、その音の音色を知っているということは、本質的に移動可能な鍵と鍵をつなぐ道が[鍵盤と手の関係として]あり、そして私がはっきりとした場所への意図をもつことができることの一部なのである。もし私がある音色を予期し、鍵盤の上方に向かい、『道を-辿る-手-の-中の-指』をその目的地に運んでいくならば、私は、場所をきちんと把握しながら、この意図を、[私の身体の各部の]うまく調整された結果として生成することになる。しかし、同時に、ジャズのアドリブにおいては、私は、私自身の手がいまどのように置かれているかと独立に、ある音色を企図するということは起こらない。そうではなくて、私は、確かな音色をもついくつかの場所から成り立つ道の上を選んで動くのである。その道は、手が知っている道であり、手はこの道によって鍵盤の上を移動するという本質的な能力をしっかりと身につけているのである。」(Sudnow 1978：p.73)

この研究は、著者がピアノのアドリブのレッスンを数年にわたって受ける中で、手、鍵盤、聴覚、その他の身体の部分が、調整された全体性へと変化していくありさまを詳細に分析したものである。

引用の部分では、ジャズピアノを弾くという行為が、その経過の中から記述されようとしている。そこでは、演奏の中でつぎの音を把握し意図するということが、演奏する手と鍵盤の間にある親密な関係性があることを基盤として、はじめて可能になるようなものであると示唆されている。

音を意図することの基盤になっているそのような関係性は、手の形として観察可能な存在である。それは、物質的で身体的な具体的な鍵盤の上の手という存在としてあり、そこにしかないものである。著者は、ピアノの上にカメラを設置して手の形を撮影し、研究の一部として提示しているが、

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Fuzzy Theory and Systems

演奏する特定の手のさまざまな形は、型のための型ではなく、また、何か別の場所にある本質的なものの代替物でもなく、演奏行為の現場にあって、演奏活動を可能にしている、身体的で日常的な知識そのものの具体性なのである。

4. 実践的帰結

本解説では、エスノメソドロジー研究が、自然な秩序性を対象とし、その方法的生成を解明しようとする経験的な研究であるとして、その中から、会話分析と作業研究という主要な2つの領域を選んで述べてきた。最後に、エスノメソドロジーを研究することの実践的意義について簡単にふれよう。

1.に述べたように、エスノメソドロジーは、社会の秩序の成り立ちに基本的な関心をもつために、その秩序に対して直接に実践的に関わりあうことを回避しようとする傾向がある。そのために、実践的目標をもたないとか、それを隠蔽していると批判されることがある。また、現象の固有の構造に関心を集中するために、知見を理論的あるいは実践的に一般化することも避ける傾向が強い。また、研究の対象が、会話や行為の細部に限定されることが多いために、知見の適用可能性が著しく狭いのではないかと疑われることもある。

私見では、エスノメソドロジー研究の実践的意義は、少なくとも3つある。[樫村 1997：pp.110-113]

第1は、成功したエスノメソドロジー研究は、社会現象の生成のための土着の方法論を明らかにするが、このような知見は、研究対象である現象がいかにして実現されうるのかについての手がかりを与える。

このような観点からの理解は、一般理論的理解とは異なる仕方で、現象の「深い理解」を与えると思われる。言いかえれば、それは、社会のメンバーの認識可能なプラクティスによって支えられた複合的現象としての理解を与える。

第2に、エスノメソドロジー研究の対象は微視的現象であるかもしれないが、それは高度に反復される、きわめて通例的な現象であるから、知見の妥当する外延は案外広いと思われる。

エスノメソドロジーは、異常な現象をとりあげる場合でも、それが通例的な秩序として達成されるという側面に目をむけていこうとする。会話にせよ、職業的作業にせよ、エスノメソドロジーのとりあげる現象は、どこにでもある、ごく普通の現象であり、通常の科学のように、発見のために帰納論理に依存することはない。それは、通常性や平常性、要するに秩序性を達成する上でのエキスパートとしての通常人の能力や知識の研究といえる。これらの能力や知識の作用は、つねに秩序性を作り出すことにある。

第3に、エスノメソドロジーは多種多様な現象をとりあげるが、それらは、社会秩序の通例的様相としての共通性がある。

しばしば、新しい権利が主張されたり、隠れた被害が発見されたりする場合には、社会秩序の通例性が、そのような主張や発見の障害となっていることがある。社会秩序が存在しなければ困ったことになるだろうが、その反面で、どのような秩序も抑圧的にも作用する可能性をもっている。実際、わが国では、エスノメソドロジーの観点からの社会的差別の研究などが早くから行われているが、エスノメソドロジー研究は、社会の通常性の装いをまとった不平等や不正に対して、素朴な評価的議論を行うのではなく、事実にもとづく批判を提示することに寄与できると考えられる。

謝　辞

表1のもとになったビデオ記録は、山崎敬一氏によって録画され、震災報道に関する私の研究のために提供していただいているものである。ここに記して感謝する。

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Fuzzy Theory and Systems

参 考 文 献

Garfinkel, Harold 1963 A conception of, and experiments with, "trust" as a condition of stable concerted actions, in O.J.Harvey (ed.) Motivation and Social Interaction. New York : Ronald Press, pp.187-238.

Garfinkel, Harold 1967 Studies in Ethnomethodology. Prentice-Hall, Inc.

Garfinkel, Harold 1991 Respecification : evidence for locally produced, naturally accoutable phenomena of order, logic, reason, meaning, method, etc. in and as the essential haecceity of immortal ordinary society (I) - an announcement of studies, in Graham Button (ed.) Ethnomethodology and the Human Sciences. Cambridge University Press. pp.10-19.

Garafinkel, Harold (ed.) 1986 Ethnomethodological Studies of Work. Routledge & Kega Paul.

Garfinkel, Harold, Michael Lynch & Eric Livingston 1981 The work of a discovering science construed with materials from the optically discovered pulsar. Philosophy of Social Sciences, vol.11, pp.131-158.

Garfinkel et al. 1987 『エスノメソドロジー--社会学的思考の解体』(山田富秋＝好井裕明＝山崎敬一・編訳)せりか書房.

Garfinkel, Harold & Harvey Sacks 1986 On formal structures of practical actions, in Garfinkel (ed.) Ethnomethodological Studies of Work, pp.160-193. (Originally published in 1969.)

Garfinkel, Harold & D. Lawrence Wieder 1992 Two incommensurable asymmetrically alternate technologies of social analysis, in Graham Watson & Robert M. Seiler (eds.) Text in Context : Contributions to Ethnomethodology. Sage Publications. pp.175-206.

Girton, George D. 1986 Kung Fu : toward a praxiological hermeneutic of the martial arts, in Harold Garfinkel (ed.) Ethnomethodological Studies of Work. Routledge & Kegan Paul. pp.60-91.

Goodwin, Charles 1981 Conversational Organization : Interaction Between Speakers and Hearers. Academic Press.

Heritage, John 1984 Garfinkel and Ethnomethodology. Polity Press.

Heritage, John C. 1987 Ethnomethodology, in Anthony Giddens & Jonathan H. Turner (eds.) Social Theory Today. Polity Press. pp.224-272.

樫村 志郎 1987 我が国の労使紛争における当事者の「背景報告」(1), 神戸法学雑誌, vol.37, no.1, pp.19-79.

樫村 志郎 1994 <席交替>の社会的達成, 現代社会理論研究, vol.4, pp.187-199.

樫村 志郎 1996 会話分析の課題と方法, 実験社会心理学研究, vol.36, no.1, pp.148-159.

樫村 志郎 1997 「もめごと」の法社会学. 弘文堂(初刊, 1989年).

Livingston, Eric 1986 Ethnomethodological Foundation of Mathematics. Routledge & Kegan Paul.

Livingston, Eric 1987 Making Sense of Ethnomethodology. Routledge & Kegan Paul.

Lynch, Michael 1985 Art and Artifact in Laboratory Science : A Study of Shop Work and Shop Talk in a Research Loboratory. Routledge & Kegan Paul.

Lynch, Michael 1991 Method : measurement -- ordinary and scientific measurement as ethnomethodological phenomena, in Graham Button (ed.) Ethnomethodology and Human Sciences. Cambridge University Press, pp.77-108.

Parsons, Talcott 1951 The Social System. The Free Press.

Pollner, Melvin 1979 Explicative transactions : making and managing meaning in traffic court, in George Psathas (ed.) Everyday Language : Studies in Ethnomethodology. New York : Irvington Publishers, Inc.

Psathas,G., H. Garfinkel, H. Sacks & E. A. Schegloff 1989『日常性の解剖学--知と会話』(北澤裕＝西阪仰・編訳) マルジュ社.

Sacks, Harvey 1992 Lectures on Conversation. 2 volumes. Blackwell.

Sacks, Harvey, Emanuel A.Schegloff, & Gail Jefferson 1979 A symplest systematics for the organization of turn-taking in conversation. Language, vol.50, no.4, pp.696-735.

Schutz, Alfred 1964 The problem of rationality in the

NII-Electronic Library Service

Japan Society for Fuzzy Theory and Systems

social world, in his Collected Papers, vol. 2 . The Hague : Martinus Nijhof, pp.64-90.

Schutz, Alfred 1967 The Phenomenology of the Social World. Northwestern University Press. (Originally published in German under the title Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt, 1932.)

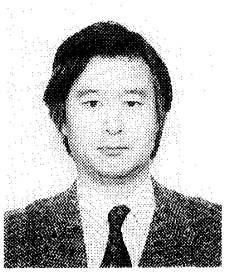
Sudnow, David 1965 Normal crimes. Social Problems, vol.12, pp.255-76.

Sudnow, David 1978 Ways of the Hand : The Organization of Improvised Conduct. Harper Colophon Edition (1981). D.サドナウ『鍵盤を駆ける手--社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門』,(徳丸吉彦＝村田公一＝ト田隆嗣・訳)新曜社(1993).

(1998年1月15日　受付)

[問い合わせ先]
〒657-8501
神戸市灘区六甲台町2-1
神戸大学法学部
樫村 志郎
TEL ：078-803-0203
FAX ：078-803-0260
E-mail：skashimu@kobe-u.ac.jp

著 者 紹 介



樫村 志郎（かしむら しろう）

神戸大学法学部

1954年 福島県生まれ。1977年 東京大学法学部卒業。1980年 神戸大学法学部助教授、1990年 同教授。1984-86年 UCLA滞在研究員。専攻・法社会学、エスノメソドロジー。

NII-Electronic Library Service